

## 彙報

### 第五六回野尻湖クリルタイ

小沼 孝博

第五六回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）は、二〇一九年七月二日（金）～一五（月）に長野県野尻湖畔の藤屋旅館で開催された。今年の特徴は、四三名の参加者中、初参加の者が約三分の一を占めたこと、そしてここ数年少なかった中央アジアやイスラーム、及び人類学に関する報告が増えたことである。

まず参加者によるコンフェッションの概要を記す。以下、「今年」とは二〇一九年、「昨年」とは二〇一八年を指し、昨年のクリルタイ以降に活字化されたものを中心に業績を紹介する。副題と書籍等の編者名・出版年は原則として省略した。

飯田和佐（九州大D）は、族譜を利用した元末明初の郷村社会を研究。広島大学史学研究会や九州史学会などで研究報告を行った。飯山知保（早稲田大）はモンゴル時代華北で勃興した「先塋碑」の分析を中心に、モンゴル支配が

彙報 小沼

一九三

親族概念や系譜編纂のあり方に与えた影響を論じた英文原著を書き上げ、刊行を待つ。井黒忍（大谷大）は女真完顔部と非女真系集団との関係を考察した「女真と胡里改」を『金・女真の歴史とユーラシア東方（アジア遊学二三三）』（勉誠出版、以下『金・女真』）に執筆。伊藤一馬（大阪大）は昨年九月に中国陝西省で唐・宋代駅伝ルートの調査を実施。単著で「北宋太祖・太宗期の内外軍事情勢と軍事指揮官」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』五九）を、飯山らと共著で“Recent Japanese Scholarship on the Multi-State Order in East Eurasia from the Tenth to Thirteenth Centuries” (*Journal of Song-Yuan Studies* 47) を執筆。牛根靖裕（立命館大）は八月に立命館東洋史学会大会で「金元交代期における司候司について」を口頭発表。永良（神戸大M）は内モンゴルで史料調査を実施し、ラマ旗に関する修士論文を準備中。大楠晋也（南砺市役所）は飛び入り参加。二〇一七年度に、一五世紀のモンゴルで用いられた中国起源の称号に関する修士論文を北海道大に提出した。岡洋樹（東北大）は昨年九月にウランバートルでモンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所等と国際会議「ユーラシア遊牧民の歴史的道程」を開催。また“*The Mobility of Mongolian Banner Subjects in the Mid-Qing Era*” (*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 76) を執筆し、*Sacred Mandates: Asian Interna-*

*tional Relations since Chinggis Khan* (The University of Chicago Press) では清朝のモンゴル統治に関する部分を担当。小倉智史(東京外大)は二年ぶりの参加。この間に学会・調査のため海外へ一三回出張するなど精力的に活動。

“Persian Historiography of Kashmir during the Gāṅgārī Period I: The Intihābi-Tārīḫ-i-Kāshmir” (『アジア・アフリカ言語文化研究』九六)、「カシミール史料におけるミールザー・ハイダル」(『西南アジア研究』八八)ほか、論文・報告多数。小沼孝博(東北学院大)は今年三月に約半年間のウズベキスタンにおける在外研究より帰国。「清末ホヴド地区における清朝統治の再編とカザフ人」(『東北学院大学論集 歴史と文化』)ほか、英語論文一本・漢語論文一本を刊行。オウンエルデネ(モンゴル国立大M)は神戸大に交換留学生として滞在。二〇世紀初めのモンゴルの政治組織に関する研究を志す。恩海船(オン⇨ダライ)(滋賀県立大D)はヒンガン盟におけるチベット仏教の歴史の変遷について、文献とフィールド調査の両面から研究。久保田和男(長野高専)は、従来の開封都城史研究の成果をもとに、南宋・遼・金・元の都城空間の比較研究を推進中。その成果を「五代十国」と南郊儀礼」(『東方学』一三七)、二度の開封陥落と中心性の移動」(『歴史評論』八三〇)、「大元ウルスの都城空間」と王権儀礼をめぐる」(『長野工業高等専門学校紀要』五

三)として刊行。小池翔平(龍谷大D)は清代の馬政や熱河承德の政治機能に関心をもち、龍谷大学東洋史学研究大会で「明清時代における馬政の変遷」を口頭発表。寇溪潔(蘭州大M)はチャガタイ語・現代ウイグル語を学びつつ、一九五〇年代の新疆トゥルファンの農地改革について研究中。ブレンソド(斉英)(内蒙古師範大)は東北大に訪問学者として一年間の予定で滞在。近年、ハラチンにおける清朝支配や社会組織の実態解明をめざす論考を多数発表。坂本直人(大阪大M)は唐代トゥルファンの墓葬文化に関する卒論を書き、今年度から大学院に進学。塩谷哲史(筑波大)は今回から世話人に加わる。ニコライ一世期ロシア帝国のアジア外交に関する研究プロジェクトを進め、“The Treaty of Chulja Reconsidered: Imperial Russian Diplomacy toward Qing China in 1851” (*Journal of Eurasian Studies* 10.2) を執筆。設楽國廣(立教大名誉教授)は、トルコ共和国大使館で「アタチュルク時代の日本との関係」と題する講演を行った。また、故護雅夫氏がイスタンブール大学で行った古代トルコ史の講義録がトルコ語で出版されたことを紹介。白川紘惟(筑波大D)は社会文化史学会大会で「清代嘉慶期初頭における清朝の対青海チベット人政策」を口頭発表。新免康(中央大)は「中国新疆における歴史書『東方五史』の「アルティ・シャフル」章について」(『中央大学アジア

史研究』(四二)を執筆。また、小沼・ブローフィーとともに論集 *Xinjing in the Context of Central Eurasian Transformations* (TBRL 20) を編集・刊行。菅原純(蘭州大)は六年ぶりの参加。新疆のイスラーム法廷文書研究を続行中。今年三月にコペンハーゲン大で開催された国際ワークショップで新疆省時代のイスラーム法廷における和解(suñ)について口頭発表。杉山清彦(東京大)は「ジュシェンからマンジュヘ」(『金・女真』)を執筆。「悪の歴史・東アジア編下/南・東南アジア編」(清水書院)では、「ヌルハチ」など清朝の五皇帝の項目を担当。鈴木宏節(神戸女子大)は、「ゴビ沙漠・南北のモンゴルをつなぐ」(『歴史学研究月報』七〇九)を執筆。昨年の内陸アジア史学会で「突厥ヒルギシーンIIオボ」碑文と八世紀前半のハンガイ山脈南麓」を口頭発表。銭穎(Columbia University)は早稲田大に訪問学者として短期滞在中。ノンフィクション映画を中心にメディア研究を専門とする。David Brophy (University of Sydney) は近世・近代の新疆(中央アジアの神秘主義教団や聖者伝に)について研究し、「Confusing Black and White」(Late Imperial China 39)等を発表。聖者伝 *Tadhkira-yi Aizdan* の英訳刊行を準備中。寺尾萌(首都大D)は二〇一四―二〇一七年にフィールド調査のためモンゴル国に滞在。モンゴルの接客技法や欲待実践を研究テーマとし、「蒸留乳酒シミン

アルヒとモンゴルの接客技法に関する「考察」(『社会人類学年報』四四)等を発表。中井勇人(東京大D)は女真(満洲人が明や朝鮮に包摂されていく過程を研究。満族史研究会大会で「マンジュ国家における葬送と支配」を口頭発表。また、東京大学のアジア研究図書館の設立支援者として満洲語史料の整理・公開に携わる。長瀬篤音(北海道大M)はティムール朝末期の歴史、特にサマルカンド政権について研究し、修士論文の完成を目指す。長峰博之(小山高専)は一八年ぶりの参加。カシモフIIハン国のカーディルIIアリーIIベグのテュルク語史書『集史』について再考した「Еще раз о сочинении Калыр-Дил-бека (《Джами ар-таварих/Сборник летописей》) (Золотоордынского обозрение 71) を執筆。中村篤志(山形大)は昨年度前半期にモンゴル国で共同研究に従事。清代(一九三〇年代)のモンゴル国の駅・隊商路について、公文書以外に、現地での聞き取り調査やドローン撮影を用いた手法で研究を進展させ、その成果を共著論文「清代モンゴルのフレイ以南一四駅站に関する基礎的考察」(『内陸アジア史研究』三四)として公表。中村和之(函館高専)は「元・明時代の女真(直)とアムール河流域」(『金・女真』)を執筆。また、北海道に流入したガラス玉や銅銭について文理融合型の研究を実施し、『函館工業高等専門学校紀要』五三号に共著論文

六編を発表。那日蘇(ナルス)(神戸大D)は蒙疆政権における軍事組織の構成要素を研究。萩原守(神戸大)は「清代モンゴルにおける犯罪者の捕獲期限」(『法制史研究』六八)を執筆し、捕獲期限を定めた「理藩院則例」条文の起源が「唐律」まで遡れることを指摘。船田善之(広島大)は「モンゴル帝国の定住民地域に対する拡大と統治」(『史学研究』三〇〇)、「モンゴル時代漢語文書史料について」(『内陸アジア言語の研究』三三三)等を執筆。昨年度から中央ユーラシア南北交通の科研プロジェクトを始動させた。堀川徹(京都外大名誉教授)は中央アジア・イスラーム法廷文書の整理作業に従事。滋賀銀行の文化講座は二〇〇回目前。前野利衣(学振特別研究員SPD)は昨年八月にビシユケクで開催されたPIAC(常設国際アルタイ学会)で、「Succession System of the Khalkha-Mongol Khans in the 17th Century」を口頭発表。同年度に東京大より博士号を取得。松下憲一(愛知学院大)は魏晉南北朝史、特に北魏を専門とする。「隋の煬帝はなぜヨウダイと読むのか」(『史朋』五〇)を執筆。宮脇淳子(東洋文庫研究員)は一二年ぶりにPIACへ参加し、「The Kyrgyz People in the Dzungar Empire」を口頭発表。一年間で『モンゴルの歴史』(刀水書房)の増補新版、『世界史のなかの蒙古襲来』など六冊の著作を刊行。また、再来年におけるPIACの日本招致計画をアナウン

ス。村上信明(創価大)は松筠の満文著作を分析した「清朝中期における旗人エリートの「旗人」意識と「中国化」」(『創価大学人文論集』三二)を刊行。『ハンドブック近代外交史』(ミネルヴァ書房)で「清朝とハルハ・モンゴルおよびジューンガル」と「理藩院」の項目を担当。山本明志(大阪国際大)は、クリストファー・ベックウイズ『ユーラシア帝国の興亡』(筑摩書房)、白石典之『モンゴル帝国誕生』(講談社)の最新刊紹介を、それぞれ「内陸アジア史研究」と「史学雑誌」に執筆。楊曦農(筑波大D)は一九世紀中葉露清関係と奕山の外交交渉について研究を進める。和崎聖日(中部大)はウズベキスタンをフィールドとする人類学者で、近年はスーフィズムの現代的意義に関心を注ぐ。「マフルの是非をめぐる知識人のまなざし」(『社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族』)京都大学東南アジア地域研究研究所)を執筆。

続いて研究報告の概要を述べる。一二日夜の報告は一つ。船田善之「鉄門関の南と北」二〇一九年三月ウズベキスタン巡検記」は、今年三月にウズベキスタンを訪問した際の史跡の踏査報告。プハラ・サマルカンドの著名な建築群のほか、プハラに残るチャガタイ・ハン国のバヤンクリ・ハンの墓廟、テルメズのファイズテパ、カラテパ、カンピルテパ等の古代遺構、及び「バーブル・ナーマ」にも登場す

るアフシケント城塞遺跡などを訪問。一部の史跡については、一〇年前の初訪時の写真と対照させつつ、近年の観光地開発による景観の変化を示した。また、ソグディアナからトハリスタンへ抜ける「鉄門関」と推定されている隘路も踏査。谷の両側に切り立つ断崖はまさに圧巻だが、南進するチンギス・カン本隊の大軍が通過したルートとしては手狭な感があり、あるいは他に峠越えできるルートがあったのではないかという疑問が残るという。

一三日午前の報告は二つ。坂本直人「トゥルファン出土の墓券と紙の利用について」は、トゥルファン出土の二点の墓券と当地の葬礼文書における紙の利用を検討。まず、当地の古墳群の発掘状況から「異例」と判断できる二点の墓券を改めて分析し、それらが当地の従来の葬礼文書とは異なる要素を持つものであり、作成の背景に唐による直轄支配と内地からの直接的な影響があると推定。また、当地の墓券は紙で作られるという特徴があり、他の葬礼文書も同様であった。砂漠に囲まれたトゥルファンでは木は入手しにくく、石も彫刻に不適な材質であったが、科学的分析を行った研究によると当地で紙を生産していたことが推測されており、文書史料からも紙の生産を担っていた人々の存在が窺える。さらに紙の利用は、被葬者の体に密着させる葬礼文書の当地における埋納方法とも関係していると考

えられる。以上が葬礼文書における紙の利用の背景であり、このような広範な紙の利用が当地における墓葬文化の特徴の一つであると結論した。久保田和男「元大都の東西南北・北宋開封・元上都との比較都城史的研究」は、元大都の都城空間を、北宋開封や元上都のそれと比較することで検討。特に政治空間としての都城空間の役割を論じ、皇城を挟んで向かい合う、南に向かう大都と北に向かう大都の空間的な差異の存在を指摘した。具体的には、南側の儒教的な空間に対し、北側の空間では上都に往還する大ハンの行列を送迎する都民が貴賤混淆する状況が出現し、それを北宋開封における「与民同樂」による政治空間に類する場として捉えた。また、一三世紀末における全真教・長春宮の衰退、ならびに一四世紀になってからの正一教と東嶽廟の大都での隆盛という政治と道教の変化に対応し、大都南城の没落、大都東門外城関廂への人口増加という、大都空間の構造的変遷の存在した可能性を指摘。それは、華北から江南への領域支配拡大、一二九二年の通惠河開通などの問題と関連づけられると推測した。

午後の報告は二つ。長瀬篤音「ティムール朝サルカンド政権支配層によるホージャ・アフラールへの対応の諸相」は、ティムール朝サルカンド政権の成立過程に注目し、政権の政治・宗教的空間の再構築を試みる。まず、スルター

ンIIアフマドIIミールザー、ウマルIIシャイフ、スルターンIIマフムードの三兄弟の分封から説き起こし、一四六九年に三人が君主として鼎立し、サマルカンド政権が成立をみるまでの経緯を、それぞれの後見人やホージャアフラルとの関係から整理。次に、三君主の宮廷機構を復元し、トヴァチ(軍務庁)のみは共通して有するが、ディーワーン(財務庁)とサドル(宗務庁)のいずれかを欠いていたことを指摘し、理由を考察。例えば、アフマドの宮廷はディーワーンとサドルを置いていなかったが、これはホージャアフラルの権益・権威を損なわないための配慮の結果であった。一方、マフムードはテルメズの聖裔ハーンザータ家と強固な同盟関係にあったが、彼らの活動を管理するためにサドルを置いていたという。ブレンソド(音英)「清代モンゴルにおける流民管理」ハラチン左翼旗を事例として「は、一九世紀前半の内モンゴル・ハラチン左翼旗を事例に、本来の所属旗が、他旗への逃亡者や農業移民(本報告では「流民」と総称)をどのように管理していたのかを検討。モンゴル語文書の分析から、①流民たちの所属タブナンに委ね、所属タブナン或いは彼らに官員を随行させて派遣し、本来の所属旗へ送還、②ザサク衙門から官員を派遣して本来の所属旗へ送還、③流民の中から特定の閑散官員を任命し、送還せずに移住先で流民を管理、という三

つの管理形態があったことを指摘。ただし、いずれの場合も、当該旗の所属アルバトからアルバ(賦役)の徴収が最も重要な目的であり、これが流民管理の動機になっていたとまとめた。

夜の報告は一つ。和崎聖日「現代中央アジアのスーフイズムの一様相」ペルシア系住民による病氣治療の儀礼は、旧ソ連領中央アジアの「僻地」に住むペルシア系住民の間に伝来する、病氣治療を目的とした「ジャフル」(Jafar、「声高のズイクル」の一種)と呼ばれるスーフイズムの儀礼を、報告者が編集した「民族誌映画」から詳しく紹介し、その歴史的・現代的な意味を考察した。この儀礼は、当該地域社会で世襲の「スーフイー」たるタジク人治療者により独特の呼吸法をもって実践されるが、そこではアフマドIIヤサヴィーによるテュルク語の詩が謳われる。彼らの姿はソヴィエト近代化からある種見放された人々を医療の観点から救う「名医」であり、その治療法の源泉にアフマドIIヤサヴィーが位置していると指摘。中国、ないし「ウイグル」から来た「マチンIIボボ」なる人物も治療法の確立に一役買ったという。結論では、遊牧社会の伝統とされてきたシャマニズムが、テュルク系だけでなく、ペルシア系の定住社会のイスラーム文化にも影響を与えている可能性を示唆した。

一四日午前の報告は二つ。飯山知保「一四〇二〇世紀華北におけるモンゴル帝国の記憶・碑文の再解釈現象を中心に」は、モンゴル時代に華北で流行した「先塋碑」をはじめとする碑刻が、一四世紀以降いかにして読み継がれ、あるいは再解釈されたのかに焦点を当て、タングト・ウイグルなどのアイデンティティが、その後どのように変化したのかを論じた。具体的には、河南省濮陽県楊村八郎村楊氏と渾池県北魚池村劉氏の二つの事例をとりあげ、前者が「タングト（モンゴル時代）」↓「夏人（明代）」↓「唐兀（一八二五年以降）」↓「漢族（民族識別工作）」、後者が「ウイグル（モンゴル時代）」↓「畏吾氏（二〇世紀初頭）」↓「维吾尔族（民族識別工作）」と変化したことを指摘。これをもとに、アイデンティティの主張・想像・維持のための社会的・文化的資源としてのモンゴル時代の記憶、及びその根拠となる碑刻は、モンゴル帝国の「中国」放棄以後も、「民族識別工作」に至るまで繰り返し再利用され、現在も新たに再解釈されていると述べた。David Brophy 「White Mountain Khojas, Black Mountain Khojas: A New Look at An Old Question」は、一七〜一九世紀のタリム盆地の歴史を左右したイスラーム神秘主義の指導者「族、いわゆるカシユガル＝ホージャ家について、史料中のカラターグリクとアクターグリクという党派が一体なを指したのかを再

検証。従来、前者はホージャ＝イスハークを祖とするイスハーキーヤと、後者はホージャ＝アフアークを祖とするアフアークと同義であると見なされ、これを前提に史料内容や個別事例が解釈されてきた。しかし、ペルシア語・テュルク語の聖者伝を仔細に検討すると、本来アクターグリクはアフアークの長子ヤフヤーの家系を、そしてカラターグリクはヤフヤーの異母弟ハサンの教団分派を指す呼称であり、前述のペアリングは歴史的に生産された誤解であったことを明らかにした。また、清によつて北京に移住させられたアフアークの弟カラマツトウツラーの子孫らも、従来の子孫組みではアフアークに属すると見なされていたが、むしろカラターグリクのネットワーク内で一定の役割を果たしていた可能性が高いと指摘。修正した新たな理解の枠組みを提示するとともに、歴史像の再構築の必要性を述べた。

午後の報告は二つ。長峰博之「ヴォルガ・ウラル地方の歴史叙述におけるチンギス家イメージの変容をめぐって」は、一七〜一九世紀に執筆された史書の記述傾向から浮かび上がるチンギス家イメージの変容を追究。一六〇二年のカシモフ＝ハン国史料、カーディル＝アリー＝ベグの『集史』では「チンギス主義」というものが強く認識されていたが、一七世紀末の無名氏『ダフタリ＝チンギス＝ナーマ』

以降、同地方におけるチンギス家の支配が終焉を迎える中で「チンギス主義」はゆらぎ始めると指摘。以後の『ブルガリーヤ史』等の歴史叙述においては、チンギス家という存在はティムール英雄譚によって相対化されていく。ところが、一七四〇年にロシアとムスリムの知識人の接触からオレンブルグにおいて執筆された『チンギズ・ハン朝史』を嚆矢に、その後のロシア東洋学の勃興のなかでチンギス家の歴史は「再発見」されていく。一九世紀後半、そうした成果を利用して『ブルガリーヤ史』への批判もはじまるが、同時に『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』の影響力は依然として残存していたと述べた。松下憲一「拓跋部の南下説話再考」は、鮮卑拓跋部の発祥地について、『魏書』序紀・烏洛侯国伝・礼志および一九八〇年の米文平による石室（嘎仙洞）の発見により、石室の所在地である大興安嶺北側が拓跋部の発祥地であり、そこから南下して内蒙古南部に至ったとされる。しかし本報告では、吉本道雅氏の研究をもとに再度序紀の史料源を検討し、序紀は黄帝の子孫という中華の正統性と大鮮卑山に住み匈奴故地を支配したという北族の正統性を主張するため、『竹書紀年』『山海経』『史記』『三国志』等を利用して道武帝期に創作されたものであることを明らかにした。また、烏洛侯国による国家先帝の旧墟の情報は、北魏の先祖が北方の大鮮卑山にいたこと

を裏付けることから太武帝に受容されたものであると指摘。よって『魏書』序紀の描く大鮮卑山からの南下は北魏になってから創作された歴史認識であり、拓跋部の発祥地を確定するものではないと断じた。

一四日夜の報告は一つ。銭穎 [Long Live the Nation: Ethnographic Documentary in China, 1940-60] は「近年盛んに議論され、ポスト・コロニアルな文脈で「内部東方主義」(internal orientalism)とも批判される、中国における「少数民族」の描写のあり方について、「民族誌／宣伝映画」(Ethnographic/Propaganda cinema)を題材に分析。先行研究と分析視角を解説した後、まず一九五八～六六年の期間に中華人民共和国政府をスポンサーとし、人類学者の指導のもとで作成された「中国少数民族社会歴史科学記録影片」から、「カワ人」(一九五八)と「四双版纳タイ族の農奴社会」(一九六二)を紹介。作成に関与した撮影者、地方幹部、民族エリートたちが「中央政府に見てほしいものは何か」という意図のもと、出演者たる村人を組織・動員し、原始共産社会を演じさせたり、在りし日の王国の姿を再現させたりしたという。続いて、重慶国民政府の指示を受けて鄭君里が監督した、民族団結を宣伝する中国初のドキュメンタリー映画「民族萬歳」(一九四一)から、チベット族とモンゴル族のパートを上映。「抗日戦争」を展開する国民



党へ協力を惜しまない諸民族の姿が映し出されたが、これは国民党が実現できなかった「五族共和」の理想を投影させたものであると指摘。ドキュメンタリー映画からは、描写・表象をこえて、多様な要素の邂逅・対立・協力のあり方を析出できると主張した。

一五日は朝食後に解散した。

冒頭にも述べたように、今回は分野・地域・時代のバランスがよく、それぞれの報告を通じて中央ユーラシア全般を俯瞰することができた。また、その分野ではほぼ定説化していた内容を覆す報告もあり、参加者からは「ショッキング」「授業内容の修正が必要」という声も上がるほどだった。民族誌と映像を鍵とする二つの報告は、ともにインパクトがあり、刺激的であった。その一方で、新疆研究をめぐる昨今の厳しい状況に対する憂慮の声も聞かれた。様々な意味で、研究の新たな方向性を模索する必要性を考えさせられた回であった。なお、今回をもって杉山清彦が世話人を退任した。実に一四年の長きにわたって世話人を務められ、献身的に運営を支えてきた尽力に対し、この場を借りて謝意を表したい。

来年は、東京オリンピック開催と、それにともなう祝日の変動を考慮し、期間を二泊三日（金〜日）に短縮して、七月の第二週或いは第三週に（調整中）、同じく藤屋旅館で

開催される予定である。新たに参加を希望される方は、野尻湖クリルタイ事務局 (altai.khuriai@gmail.com) までご連絡いただきたい。

（東北学院大学文学部・教授）